今日の学生の社会認識状況

——'87年度1回生「基礎ゼミ」授業実践報告——

奥　田　修　三

はじめに
Ⅰ　経済学部基礎ゼミ＜18ａ＞クラスの構成
Ⅱ　基礎ゼミクラス調査
Ⅲ　年間授業計画と実施状況
Ⅳ　前期授業実施の状況
Ⅴ　後期授業実施の状況
Ⅵ　社会常識テストとビデオ学習
Ⅶ　レポート提出
Ⅷ　アンケート調査
Ⅸ　単位認定状況
Ⅹ　ま　と　め

はじめに

本学において昨1987年度より、教員有志により「教育問題懇談会」がつくられ、学生実態に即した大学教育をどうすすめるか、教員それぞれの経験をもちより検討する、月1回をめどの研究会がもたれてきている。昨年度後半は、1、2回低回生の少人数クラス授業について検討が行われた。本稿はその一環として、'88年3月第4回研究会で報告したもので、私が担当した'87年度（'87年4月～'88年3月）「基礎ゼミ」の授業経過報告であるが、'87年4月入学の1回生学生の社会認識状況の実態と分析を中心にすえて、1年間の授業を整理したものである。

本学のみならず、ほとんどの私立大学では、一方のマスプロ授業の欠陥をおぎない、大学での学習に習熟させるために、1回生に少人数クラスによる「入門ゼミ」（名称はさまざま）が実施されている。本学では、経済、法学部とも、1回生に「基礎ゼミ」をクラス指定で課している（一般教育科目、社会科学分

野の４単位として認定)。

「基礎ゼミ」の性格づけと目標については、のちに述べるが、各担当者により、さまざまの形態と方法によって運営されている。本稿では1987年度に私が担当した経済学部＜18ａ＞クラスの授業実態を、できるだけ詳しく紹介するが、先述のように、新入１回生（1970年生れが中心）の社会認識の状況と、それに対応する指導の実態も紹介し、学生の社会認識にどのような変化を見出しえたか、なども検討していきたい。

Ⅰ　経済学部基礎ゼミ＜18ａ＞クラスの構成

このクラスは、1）男子19名、女子３名　計22名、2）出身府県は近畿７（大阪５、兵庫１、三重１)、中部４（岐阜２、愛知１、静岡１)、中国４（広島２、島根１、山口１)、四国５（徳島２、香川２、高知１)、九州１（鹿児島１)、東北１（秋田１）である。女子は大阪１、四国２である。3）出身高校、普通高校19、商業高校２である。4）現浪別では、現役12、一浪５、二浪３、不明１である。5）他大学受験有無では、21人中16名が「有」としている。

Ⅱ　基礎ゼミクラス調査

最初の授業の日（'87年４月16日）に、つぎの設問項目によるアンケート調査を行った（22名中21名が出席)。学生の実態を知るためである。○氏名　○住所　○帰省先　○出身高校　○卒業年　○高校でのクラブ活動　○高校生活で印象に残っていること　○本学以外に受験した大学、学部名　○本学を志望した理由　○これからどういう事柄（分野）を勉強したいか、それに関連したことは何でも(1)　○今の時点で将来の進路について考えていること　○高校時代読んだ本(教科書以外)、覚えておればその書名　○現在の日本および世界の動きで、もっとも重要と思う事柄を二つあげ、それについて知っていること書いて下さい(2)。

これらの項目のうち、下線をしている二つの設問に対する学生の回答は、つぎのようである。下線(1)の設問に対しては、21名中７名は無記入である。記入した14名の回答を、記入された文言のまま紹介すると、つぎのようである。

1. 会計学　2. まさか自分が経済学をやるとは思っていなかったが、入ったからには経済学をやりたい。でも本当は心理学をやりたかった（注、女子学生）　3. 社会の動き　4. コンピューターについて　5. 経済の本をすぐ理解できるような勉強をしたい　6. 経済と経営―ソニー等の世界的に有名な会社に入りたいので　7. 特にないが、経済、法学を通して社会生活に少しでも近づければと思っている　8. 簿記会計　9. 人文学的なこと　10. 日本経済のあり方について　11. これからの世界における政治、経済のあり方について　12. 日本の社会問題について（高齢化社会やいじめなど）　13. これから経営学、商業、経済学について学んでいきたい。将来自営業をやりたいので　14. 経済学。

21名中14名の回答率は66％になり、三分の一の学生は何を勉強したいかを明確にしえていないが、三分の二は経済学部新入生ということで、「自営」のための勉強や簿記会計などの実務的勉強を目指しているものと、広く日本や世界の社会や経済についての知識を得たいとしているものとの二つに特徴づけることができる。

下線(2)の設問に対しては、21名中２名が空欄にしているが、19名は何らかの記入を行っている。同様に、回答文章をそのまま紹介する。

1. 円高、売上税、僕たちにとっていいことだけど（海外旅行などは安いから）、輸出産業の会社は不況にこまっている　2. 売上税　3. エイズ対策　4. 円高とエネルギー問題　5. 牛肉がたらふく食べられるよう、もっと輸入してほしい。今、円高なので外国に行きたい　6. 円高、売上税問題　7. ジャパユキさんの問題　8. 円高とドル安。まず日本がのりこえなければならない一つであると思う。今黒字であるために、諸外国からせめられていて、へたをすると、アメリカとの外交関係がストップしかねないといえる。鉄鋼業はしかり、車産業も危ない。電機メーカーも、ＩＣでもめていて、日本という国が今、内と外と両方でめちゃくちゃになりかねない。我々はただじっと政府のやることを静観しているしかできないのでしょうか　9. 日本の中では、今の状態は近代経済にもどりつつあるところが少し不安で（ex. 国鉄の民営化）、中曽根さんが売上税を強行するのではないかというのが、今一番の恐怖です。人間は誰も完璧ではないけど、国民にウソをつくようであれば、もはや統治者ではないと思うのである（注、女子学生）。10. レイキャビクでの会談、ソ連とアメリカのわがままの言いあい、アメリカの輸入制限、日本のＩＣ関係の輸入をストップする　11. 中曽根の売上税問題、日米貿易摩擦　12. 円高問題　13. 円高、エイズ　14. 売上税問題、あれは間違いなく、こうやくいはんだ。自民党ばかり政権をとらしておくべきではない。円高一時間をかけて上（ママ）るのはいいと思うが、あのように急に上（ママ）ってしまえば、対応のしようがないと思う　15. 核廃絶、国際協調　16. 反核運動―ひとにぎりの人間のために殺されるのはイヤだ　17. 今日、日本中で話題になっている売上税や米国また他諸国との貿易について、これからどうやって解決されていくか、興味あるの

で、これらについて研究していきたい　18. 日米貿易摩擦、円高ドル安、日本の軍事大国家(ママ)　19. 無。

以上19名中、最後の「無」を除外して記述内容をみると、この1987年４月当時の政治・経済・社会についての最大の問題は、売上税と円高・日米貿易問題であったから、学生の回答もそれを反映している。また、レイキャビクの米ソ首脳会談もあり、反核問題について、２人がとりあげている。設問が「日本と世界の動き」の中で、ということであるから、政治・経済の問題をとりあげているが、売上税では、中曽根首相や自民党への批判が述べられているもの、また貿易摩擦で、政府の方策を批判しているものもある。「エイズ」や「ジャパユキさん」をあげているものもある。全体として、新入学生として、それなりに、設問に青年らしく対応している。こうした現実社会への問題関心が、このゼミおよび１回生全体の講義や学習の中で、科学的な社会認識力として、どのように高められるか、ゼミの経過とともに検討していきたい。

Ⅲ　年間授業計画と実施状況

(1)　「基礎ゼミ」のネライ（獲得目標）

本学での「基礎ゼミ」の性格については、『学修の手引』（1987年版より引用）では、① 指定された少人数クラス（30名以下）、② ゼミナール学習の基礎的訓練をおこなう、③ 学生の報告と討論による学習、④ 文章表現力の養成、⑤ 教員と学生、学生相互間の交流の場、⑥ 一般教育科目、社会分野４単位の６点が説明されている。各担当教員は、それらを基準として、それぞれ工夫をこらして実施している。第２回教育懇談会での東郷報告では、① 学生間の、学生と教員間の交流、② 読み書きの基礎的力の形成、③ 専門に対する関心の形成、の３点が基礎ゼミの目標とされている。第３回教育懇談会（'88年１月26日）の永平報告（「私のゼミナール像」）では、① 気楽に討論できる人間集団の形成、② 学問的深さへの追求―「気楽な話しあいから（雑談的話しあいから）、科学的な話ができるようにすること」が目指されている。両実践とも、本学の学生実態（学生の学力水準など）をふまえての目標設定である。

私の場合は、つぎの４点を基礎ゼミの獲得目標にした。① 社会科学系学部

（経済学部）の１回生として、社会科学的なものの見方、考え方の基礎をつくる。② 小集団（少人数）クラスとして、共同学習を重視する―グループ分けによるグループ単位の学習・報告・討論をすすめる。③ そのためのクラス集団の形成―クラス委員、友人関係の形成。このうち①の「社会科学的なものの見方の基礎」の形成といった場合、この１回生クラスで念頭においたこと、即ち見方形成の筋みちには、つぎの内容をふくませた。Ⓐ 社会の現象（社会的現実）をまず客観的にとらえるという訓練を目指す。よかった、面白い、好き、嫌いといった即自的なとらえ方を越えて、社会事象を客観的にとらえる力をつくることを目指す。Ⓑ その社会事象を変化と発展の中で（歴史的に）とらえる、また全体との関連の中でとらえる。Ⓒ なぜそのような事象が生じるのか―原因と結果―因果関係をみていく。こうした視点を考えたのは、高校までの学習では、社会科学の学習でも、教科書の記述を絶対として、「答えは」、「正解は」を求めて、それを「覚える」という勉学の仕方がみられるので、「正解」を「覚える」のではなくて、まず事象を客観的にとらえ、その原因や経過や結果などを考えるという学習方法を学生の身につけさせることが大切だと考えたからである。基礎ゼミの獲得目標を以上のように設定した。

⑵　年間授業計画

以上から、つぎの年間授業計画をたてた。

⑴　はじめの２～３回は学生や担当者の自己紹介、班づくり、運営委員長などの選出。基礎ゼミの目標、すすめ方について共通理解づくりを行う。

⑵　つぎの３～４回では、教育関係の新聞記事を材料に、教育問題の討議を行う。新入学生が最も身近に経験してきた社会的現実である教育問題を材料に社会事象を客観的にとらえる力をつくる。

⑶　つぎの４～５回は、担当者より提示した参考文献を、班ごとに選択させて、報告・討議を行う。

⑷　後期は班ごとにテーマを自由選択して学習、研究させ、報告・討議を行う。

⑸　後期末の適当な日時を設定してビデオによる学習を行う。

以上のごとき計画をたてたが、前期はテキストの提示をふくめ、担当者のイ

ニシアチブが強いが、後期はできるだけ学生の自主性を形成、尊重することを目指した。後期の班テーマの設定は社会科学に限らず、文学から男女論その他何でも興味あるものを選んでよいとした。実際の進行状況はあとで述べる。

まず、この基礎ゼミ授業は、学生の報告・討議を中心とするものであり、出席して報告を聞き、発言して考え、それらを通して社会科学の見方、考え方を自分のものにしていくことが求められるのであるから、日常の出席を強く求めるとして、三分の一以上の欠席は、単位認定の必要条件を欠く旨、しばしば学生に伝えた。しかし、出席だけでは、充分条件でなく、レポートその他課題が課せられることも、開講時に学生に知らせておいた。

学生の出席状況を示しておく。前期４月16日～９月17日間13回、後期10月１日～１月21日間13回、計26回が年間授業回数（休講なし）。

毎回10～19人が出席した。個人別出席状況では、出席１～６回３人、７～10回２人、11～15回２人、16～20回７人、20～24回４人、25回以上４人である。６回以下の３人の内訳は１人は最初の１回のみ、１人は前期５回欠席、１人は他大学受験のためであった。

(3) 年間授業実施状況

実施した授業状況を最初に表１（次ページ）にして示しておく。

なお、クラスづくりとゼミ運営のために、<18ａクラス連絡メモ>を担当者が作成し、その都度全員に配布した。① '87. 5.7 ② '87. 5.14 ③ '87. 5.28 ④ '87. 6.25 の４回配布した。後期は学生の自主性を育てるために、連絡メモは出さなかった。学生運営委員の働きを期待したが、充分にはいかなかった。

Ⅳ 前期授業の実施状況

(1) 教育関係新聞記事をめぐる討議状況

次ページの表２は、<連絡メモ>①であるが、実名は伏せた。新聞切抜は、朝日、毎日両紙より、教育関係の記事を拾い、Ｂ４の用紙にコピーして配布した。さまざまな記事のうち、各班で関心のある記事を選ばせ、教室内でも、音読し、内容を紹介・説明させ、全体で意見・感想を述べさせるという方法をとった。

表　1

回数	月日	内　　容	回数	月日	内　　容
1	4/16	自己紹介・基礎ゼミ運営について	14	10/ 1	同上　（グループ討議）
2	23	同上　運営委員選出	15	8	同上　（　同上　）
3	30	同上　グループ分け	16	15	グループ(班)報告・討議
4	5/ 7	教育問題（新聞記事切抜による）討議	17	22	同上
5	14	同上	18	29	同上
6	21	同上	19	11/ 5	（クラス内対抗ソフト・ボール試合）
7	28	同上　（図書館見学）	20	12	グループ(班)報告・討議
8	6/ 4	グループ学習・報告・討議	21	19	同上
9	11	同上	22	26	同上
10	18	同上	23	12/ 3	社会常識テスト
11	25	同上　クラスコンパ実施（出席15名）	24	10	ビデオ学習（高島炭坑閉山）
12	9/10	夏休中状況報告・担当者「42年目の夏」	25	1/14	上記感想文についてのコメント
13	17	後期ゼミのすすめ方について討議	26	21	ゼミ１年間のアンケート調査クラスコンパ実施(出席10名)

表　2

≪基礎ゼミ18ａクラス連絡メモ≫　①　　1987.5.7

1）　クラス委員　　３名（氏名略）

　　代議員　　１名（ 同上 ）

　　上のように、４月23日に選出した。

2）　共同学習、報告・討論のため、小グループをつぎのようにきめた（４月30日）。

１班	２班	３班	４班	５班	６班
（氏	名	は	略	す）	
４名	４名	３名	４名	３名	４名

氏名の左の○印は班長

3）　スケジュール

　５月７日、14日、21日の３回は、教育問題新聞切抜を素材に報告・討議をする（４月30日に３月～４月分切抜コピー、Ｂ４、19枚を配布）。５月28日以降は、選んだテーマ・テキストにより、班ごとに報告する。

4）　課題「私の高校、私の町」、400字詰用紙５枚（2000字）５月21日、基礎ゼミの時間に提出のこと。

このうち、'87年5月7日の「乱塾自粛のすすめ」(社会面)、その他学習塾問題に関する記事をめぐっての討議状況を、一例として紹介しておく。この記事は、塾が乱立し、小、中学生の大多数がそれに通っていること、どれだけ塾があるのかの調査もないことなど、学習塾の実態を紹介したものである。それらをめぐって「塾問題をどう考えるか」をテーマに意見を交換させた。担当者から発言をうながしたが、学生の発言は、(1) 教育の水準があがれば塾はさけられない、(2) 教育は学校でする程度でいいのではないか、(3) 乱塾というまえに塾がはやる原因をはっきりさせるべきだ、(4) 公立と私立一学校の勉強での差があるから塾が生れる、などであった。学校の中に、「勉強の差」があるから、よい学校を目指すものは塾に行く。よい学校とは「教育水準が高い」学校で、そういう学校が生れると、塾はさけられないというのが、(1)(2)(4)の見方である。「勉強の差」、「教育水準」という形で学校格差をみており、学校の序列があれば、塾が生れるのはやむをえないという認識である。(3)の方向で議論は展開しなかった。今日の学校歴社会での、進学主義、競争主義教育の中から問題をとらえるには至らなかった。自分たちが経験してきた学校教育実態を批判的にみることはできなかった。最初の討議であるから、過大な認識を求めるのは無理である。

3回の授業で教育現状に関するいくつかの項目をとりあげ討論したが、それらについての400字程度の感想文を求めた。15名の提出文にみられる学生の問題のとらえ方をみると、つぎのように整理できる。

「今までもらった新聞の切りぬきでとらえられていた教育問題は、どれも考えさせられるものばかりでした」と述べているもの（1人）、ファミコン遊びについて2人、いじめの問題について3人、大学進学や大学の現状についてが6人、学歴社会について2人、日の丸問題1人となっている。いじめで自殺した小学生の事件に関して、「自分で自分自身を守るべきだ」、「学校の仕方が悪くいわれるのは問題だ」、「弱肉強食の社会の影響」という見方を書いている。これらはいじめるもの、いじめられるもの、それは個人の問題としてとらえていることを示している。大学の現状と大学進学さらに学歴社会の問題では、過半数の8人が述べているが、新入学生として一番身近な体験であるからだろ

う。高校時代進学問題でなやまされてきたことを述べているもの、入学は容易だが卒業はきびしいという大学制度の必要性、また、大学進学の目標の明確化がより必要とするもの、大学の格差、学歴社会の現状に対して急速には改革されないだろう。学歴社会からはなれるには、「縦社会」でない自分の腕でたつ「職人の世界」しかないのではないかという意見もみられる。「卒業式で＜日の丸＞が捨てられた」記事に「強いインパクトを感じました」とする学生は今日の文部省の教育政策を批判している。

これらを学生の認識実態としてどのようにみるかはむずかしいが、この授業のネライは先述のように、新入学生がもっとも身近に体験してきた今日の学校教育を社会的現実として客観的に対象化してとらえる力をつけるところに置いたが、最後の一人を除いては、それらについて実際的対処を考えるという視角でしか、とらえていないといえよう。さきの「塾」の問題のとらえ方と共通しているといえよう。

⑵　「現代社会の諸問題」に関して各班報告

1)　問題の提示

前期後半はつぎのような＜連絡メモ＞②（表３）を学生に配布し、各班メンバー相談のうえ、興味・関心のある分野と文献を選び、順次、学習報告するように求めた。Ⓐ～Ⓜの問題分野は、「現代社会の諸問題」として、社会科学（経済学）を学ぼうとする学生に必要と考えて、私が適宜設定したものである。提示している参考文献は、新書版、ブックレット版、文庫版に限って選んだものである。すぐ入手できるものであることと、何よりもこうした社会科学関係の書物を読むことに馴れていない今日の学生に、できるだけ手軽なものということで選んだのであるが、結果として、これらの問題分野と参考文献が、今日および本学の学生実態もふまえたものになっていたかどうか、あとでもふれたいと思う。

2)　学生各班の分野・テキスト選択

５月14日にはこの＜連絡メモ＞により、各テーマおよび提示の参考文献の概要について解説した。そしてこの日とつぎの５月21日の両日を各班検討の時間にあてた。その結果は＜連絡メモ＞③（表４）のようであった。なお選んだ本

表 3

≪基礎ゼミ18ａクラス連絡メモ≫② 1987.5.14 5月28日以降の班学習・報告――「現代社会の諸問題」例示。参考文献・資料は新書版、文庫版、ブックレット版にかぎった。各班相談のうえ、下記より選ぶこと。		
Ⓐ	教育問題	○山田洋次『寅さんの教育論』（岩波ブックレット） ○太田　堯『私たちののぞむ教育改革』（同上） ―選抜から選択への転換を― ○山住正己『教科書問題とは何か』（同上）
Ⓑ	食糧問題	○西川　潤『食糧―21世紀の地球』（同上） ○鶴見良行『バナナと日本人―フィリッピン農園と食卓のあいだ―』（岩波新書） ○井野隆一『日本の食糧』（新日本新書）
Ⓒ	婦人問題	○岩波編集部『雇用の平等と女と男』（岩波ブックレット）
Ⓓ	アフリカ問題	○篠田　豊『苦悶するアフリカ』（岩波新書） ○村井吉敬、甲斐田万智子『誰のための援助？』（岩波ブックレット）
Ⓔ	公害環境問題	○田尻宗昭『公害摘発最前線』（岩波新書） ○佐久間充『ああダンプ街道』（同上） ○原田正純『水俣病』（同上） ○工藤『ほろびゆくブナの森』（岩波ブックレット）
Ⓕ	核問題	○中沢啓治『はだしのゲンはピカドンを忘れない』（岩波ブックレット） ○具島兼三郎『全面核戦争と広島・長崎』（同上）
Ⓖ	交通問題	○岡　並木『都市と交通』（岩波新書） ○宇野弘文『自動車の社会的費用』（同上） ○平井都士夫『国鉄解体の危機』（新日本新書）
Ⓗ	住宅問題	○早川和男『住宅貧乏物語』（岩波新書） ○同上『新日本住宅物語』（朝日選書）
Ⓘ	家族問題	○松原治郎『核家族の時代』（ＮＨＫブックス）
Ⓙ	民族問題	○李　恢成『伽倻子のために』（新潮文庫） ○金　賛汀『異邦人は君ケ代丸に乗って―朝鮮人街猪飼野の形成史―』（岩波新書）
Ⓚ	戦争と平和の問題	○岡倉古志郎『死の商人』（岩波新書） ○村上重良『靖国神社』（岩波ブックレット） ○藤原　彰『南京大虐殺』（同上） ○渡辺　治『憲法はどう生きてきたか―平和と自由を求めた40年―』（同上） ○北畠宏泰編『ひとりひとりの戦争・広島』（岩波新書）

Ⓛ	経済問題	○宮崎　勇『80年代の日本経済』（岩波ブックレット） ○岸本重陳『中流の幻想』（講談社新書）
Ⓜ	労働問題、部落問題、貿易問題、その他	

表 4

≪基礎ゼミ18ａクラス連絡メモ≫③　　1987.5.28

5月21日のゼミ時間に各班で相談してきめたもの

① 各班の選択テーマと使う参考文献

1班	（氏名略）4名	教育問題	太田　堯『私たちののぞむ教育改革』（岩波ブックレット）
2〃	〃　4名	核問題	具島兼三郎『全面核戦争と広島・長崎』（同上） 当初中沢啓治『はだしのゲンはピカドンを忘れない』をえらんだが、入手できず変更
3〃	〃　3名	住宅問題	早川和男『住宅貧乏物語』（岩波新書）
4〃	〃　4名	戦争と平和の問題	岡倉古志郎『死の商人』（岩波新書）
5〃	〃　4名	家族問題	松原治郎『核家族の時代』（ＮＨＫブックス）
6〃	〃　3名	民族問題	未　定

氏名の下の線は5月21日に出席したもの、左肩の○は班 Cap（世話人）

② 次の日程により、各班は班ごと学習し、レジメをつくり報告する。レジメのつくり方は話す。報告は10分位。

6月	4日(木)	（担当班）
	11　〃	（　〃　）
	18　〃	（　〃　）
	25　〃	（　〃　）

③ 課題作文『私の高校、私の町』未提出者は早急に提出すること。

の購入はそれぞれ、八尾市内、大阪市内の書店で、各班各自が責任をもって行うように指示した。学内書店に一括注文という形にしなかったのは、学生に書店に行き自分でさがし出すことも、大切な経験であると考えたからである。

この＜連絡メモ＞③にあるように、5月21日の班討議（相談）で各班のテーマを決めたが、充分に討議して決めたとはいいがたい。当日の出席者は、1班

2名、2班3名、3班1名、4班3名、5班3名、6班なしという状況であった。3班は個人の選択であり、他の班も欠席者に対してそれぞれ後日合意をうるように指示した。メモでは空欄になっている6班はのちに、金賛汀『異邦人は君ケ代丸に乗って―朝鮮人街猪飼野の形成史―』をとりあげることになった。

ところで担当者が例示した12テーマのうち、学生は六つ選んだが、これをどのようにみるべきか。教育、住宅、家族、核、戦争・平和問題と民族問題であるが、食糧、婦人、公害、アフリカ、交通、経済問題は外れている。高校までに形成された社会現実への認識実態と、この選択との関係は検討する必要があろうが、'87年度現在の学生の関心状況を示している。

3）各班報告状況

報告はレジメを用意し、担当班全員が前に出て、班代表または分担者が報告し、質疑、討論を行う、ただし司会は担当教員の私が行うという方法をとった。6月4日～6月25日の4回の授業時間につぎのように行われた。6月4日―第4班「戦争と平和の問題」、6月11日―第1班「教育問題」、6月18日―第2班「核問題」、第3班「住宅問題」、6月25日―第5班「家族問題」、第6班「民族問題」。

以下各班報告・討議の実情と特徴点を二、三に分けて書いておく。

① **レジメについて**　レジメの内容は、テキストの部分的抜粋に終っていて、テキストの内容を消化し、問題点、疑問点を明確にしてレジメ化していると評価できないものが大部分であったが、1回生前期ということでは、各班はそれぞれコピーしたものを用意したことは、それとして評価すべきと思う。各班レジメでの柱立てなどを紹介しておこう。

- 4班「戦争と平和の問題」、『死の商人』　1．死の商人とは。2．本の内容。3．死の商人について。
- 1班「教育問題」、『私たちの教育改革』　1．本の要約。2．問題点。
- 2班「核問題」、『全面核戦争と広島・長崎』　1．全面核戦争と広島長崎の核による被害データ。2．全面核戦争の場合。3．核戦争後の被害は。4．アメリカとソ連の原爆数は。
- 3班「住宅問題」、『住宅貧乏物語』　第6章「過密住宅の影響」の内容をチャート化して、「人間にとって過密住宅とは」→「肉体的・精神的にそして道徳的に人間とし

ての尊厳を傷つけること」。「人間が人間らしく生活するためには、人間にふさわしい空間が保障されなければならない」→それが「住宅の最低条件」だとしている。

- 5班「家族問題」、『核家族の時代』　1. 核家族の教育にもたらす歪み。2. 解決等。3. その他の問題。
- 6班「民族問題」、『異邦人は君ケ代丸に乗って』　1. 朝鮮現代史。2. 何故約70万もの朝鮮人が日本に住んでいるのか。3.『異邦人は君ケ代丸に乗って』。<おわりに>「君ケ代丸に乗って来た異邦人の生活は現在も、基本的には、重要な問題はほとんど未解決のままである。この事を書いていて痛切に感じていることは、まさにそのことであり、在日朝鮮人の置かれている状況の再認識であった。それは私達在日朝鮮人の問題であるとともに、日本人の問題であるが、日本人側にそれを日本人の問題として認識する人がいかに少ないことか、このレジメで、在日朝鮮人問題は、それはまた日本人の問題であると認識してもらえる契機にでもなれば幸いです」。

第3班「住宅問題」と第6班「民族問題」の二つのレジメの内容および報告は、このクラスの、1回生学生として、問題意識を明確にしたものであった。

② **報告、質疑、討議の状況**　レジメにもとづく「口頭報告」を要求したが、実際はレジメとして書いた部分を読むのが精一杯で、レジメによりながら説明することは、3、6班を除いて、ほとんどできなかった。司会は前述のとおり担当者が行い、若干のコメントを加えながら、質問、意見を求めるものの、2、3人を除いては、なかなか発言がない。質疑討論というように進行しない。共同学習を要求して、班分けを行い、班としてテキストを選ばせるという形ですすめたが、実態として共同学習がほとんど成立していない（班長のイニシアチブと問題意識のあり方、共通の空時間割のこと、討議する場所の問題などが、共同学習を成立させない）。レジメ、報告とも相対的にすぐれていた住宅問題、民族問題は、班グループでの討議の上ではなく、両者とも班長である学生の積極的な、同時に引受けの形で行われている。したがって、これらの授業を通して、学生の認識状況が、全体としてどのように変化し発展して行ったかは、把握することはできなかった。それにしても各班が責任をもって、レジメをつくり報告したことは、新しい体験であったようだ。6月の4回の授業の最後に、「授業を終えて」という感想文を求めた（400字以内）。18人が提出したが、その内容を紹介し要約するとつぎのようである。

第1は、発表・質疑・討論というこの授業様式の成果を確認していることで

ある。「自分で考え発表するという、自分の行動を重視するということです。…毎時間これほど自分の頭を使うということはありませんでした」。「みなぎこちないながらも、1班から6班まで意見を発表しあった。…レジメなるものにも初めて出会って、各班よくやっていた」。「今までは社会問題などあまり考えていなかったが、この授業をうけてからは、少なくとも1週間に1度は考えるようになったし、いろいろな問題にもきょうみが持てるようになり、勉強になったと思う」（4名）。

第2は、今まで見すごしていた社会の諸問題に目を開くようになったと述べているものが多い。社会的現実への関心をもつようになることは科学的な社会認識への道になる。「これまでの3回の討論をずっと聞いてみて、改めて今の世の中問題だらけだと、びっくりしている」。「種々の社会問題について話し合ってきましたが、いかに自分が何も知らないということを思いしらされた」。「この世の中には、まだまだ自分が知らなかった問題があることに気づきました。自分にはぜんぜん関係ないと思っていたことも、いろんな話を聞いていると、自分にも少しは関係があるのではないかと思うようになってきました」。「全(ママ)の問題が大変ためになり、また興味をそそられるものばかりでした。…今までとり上(ママ)げられた問題は全て日本人にとって考えなければならない物(ママ)だと断言できるのではないでしょうか」。「基礎ゼミでの話し合いをしたことによって、日常生活ではべつに気にもしなかったことなのに、けっこう問題になっていることが多いことに気がついた」（5名）。

第3は上のような視点から、具体的には、住宅、家族問題とともに、多くの学生がもっとも印象に残ったこととして、Y君の報告した在日朝鮮人問題をあげている。

(3) 夏休暇中課題

夏休前につぎの<連絡メモ>④（表5）をもって夏休中の課題を出した。

表 5

≪基礎ゼミ18ａクラス連絡メモ≫ ④　　1987.6.25

夏休中の課題―つぎのⓐⓑのいずれか。

ⓐ 夏休中に読んだ本（社会科学、人文科学、文学その他、いずれでも1冊）の読後感想文を書く。

ⓑ　現代社会の諸問題のうち、関心のあることを取上げ、調べて小論文にまとめる。
- 200字詰用紙15枚（3000字程度）
- 提出は9月17日(木)授業時間
- 単位認定のための必要条件である。

休暇後提出されたものは22人の在籍者中12名で読書感想文10篇、小論文は2篇であった。読書感想文はつぎの10冊をとりあげたものである。夏目漱石『坊ちゃん』、同『硝子戸の中』、倉橋由美子『聖少女』、江戸川乱歩『人でなしの恋』、『少年・あかね雲』、『古都』、カミユ『不条理な人間』、高島善哉『社会科学入門』、飯田経夫『豊かさとは何か』、『日本の経営組織』。著者のわからないものもある。小論文は「平和と安全」、「土地問題について」をテーマにした二つであった。それぞれをとりあげた動機などの検討は学生の実態をとらえるうえで大切であるが、ここでは省略する。

Ⅴ　後期授業実施の状況

(1)　後期授業の方針

9月17日および10月1日の2回の授業時に、後期ゼミのもち方について、担当者よりの提案にもとづき、班別討議を行った。私が示した「後期授業の方針」はつぎのようである。

(a)　各班別による学習、報告、討議という形を、前期後半につづいて行う。ただし各班でとりあげるテーマは自由。人文、社会、自然科学はもちろん、文学、時事、その他何を選んでもよい。

(b)　班として共同作成の（個人別でない、連名の共同レポート）レポートを期末に提出すること。

(c)　報告班以外の出席者は、毎授業後、感想文を提出する（したがって、各人それぞれ5回提出することになる）。

(d)　各班の共同学習をすすめること。そのため「班学習、研究に関する報告」を班ごとに作成して提出すること。

この4項目の授業方針は異論なく了承された。(d)の報告書用紙の項目はつぎ

のごとくである（表6）。ここでは記入する空欄は省略した。

表　6

18ａクラス班学習・研究に関する報告（1987.10.1 作成）
○班、班員なまえ ○研究テーマ ○このテーマがきまるまでの検討の経過（ほかに出たテーマ） ○このテーマの説明（どのようなことをこのテーマで調べるかなど） ○調べたい文献・資料 ○発表日までの学習・研究の日程 ○発表日　　月　　日（木） ○指導

(2)　「班学習・研究に関する報告書」整理

提出された報告書を一覧表にして、次ページに示す（表7）。

(3)　各班報告

10月25日～11月26日までの6回に分けて、各班の報告を行った。以下、各班のレジメの簡単な紹介と、討論中での学生の発言および授業後の感想文などを紹介し、学生の問題意識と認識状況をみていきたい。

①　10月15日　1班　「土地問題」

レジメには「地価の高騰」の「原因　東京への一極集中が進み、土地やビル、住宅などの需給バランスがくずれたこと。土地ころがし　膨大な貿易黒字などによる国内の余剰資金」。「対策　地価を抑制するためには、地価を上げないための方法」が書かれ、新聞記事を中心にみてきたという報告がされた（女子学生、Ｉ君）。16人の出席者中、司会（担当者）の指名により発言した11名（５名は発言なし）の発言内容は、○東京はバランスがくずれたというが、実際はくずれていない、○税制の活用とはどういうことか、○原因は何か、国内の余剰資金か、○地方における地価上昇の状況はどうか、○偽装農地のチェックは必要、などの質問があった。地価問題はこの時期もっとも“up to date”な問題であったから、学生はそれぞれ関心をもっていたことから、さまざまの質問を出したといえる。もちろん短時間の質疑応答で共通の結論的まとめを出せなかったし、また地価高騰の根本的原因に迫ることもできなかった。現象的

表 7

班	発表日	研究テーマ	このテーマがきまるのでの検討の経過（外に出たテーマも）	このテーマの説明（どのようなことをこのテーマで調べるか）など	調べたい文献・資料	発表日までの学習・研究日程	指　　導
1班 4名	10月15日	土地問題	今新聞を読んで何が目についたか。土地の値がやたらつり上がっていることが気にかかったことが理由	大都市の地価の高騰のあまりの異常さに対しての意見。どうしてこうなったか。どうすればよいか	本を探してみんなに読んでもらうには時間がないので、新聞を家や図書館で読む	来週の語学の時間までに各自の意見をのべてもらう （火 独語 1.　水 英 1.）	新聞記事で 1.　地価高騰の現状―大都市とくに東京における―を確認する。それが国民生活にどのような影響を与えているか 2.　原因を考える 3.　どのような対策が考えられているか、臨時行政改革推進審議会答申（87.10.12 答申）
2班 4名	10月22日	教育問題について	寮の食事について ここの大学の定員について		その日の新聞		焦点をしぼること、今日の教育問題とされているもののうちどれをとりあげるか、それをきめること
3班 3名	10月29日	第二次世界大戦について	音楽、経済学、歴史等を見てきたが、全てに多大な影響をおよぼしているので	帝国主義国の上層階級のすさまじいまでの侵略の仕方。上層部の一般市民をおさえた力	太平洋戦争―開戦から講和まで 太平洋戦争史論 エノラ・ゲイ 戦後史と日本軍国主義	発表日までの2週間の月曜から水曜日まで（6日間） 第1週→どのような人物がどのような考え方を持っていたかを調べる 第2週―それによって、まきこまれた一般市民とそれを支配していく上層部との関係	第二次大戦だけでは大きすぎる。焦点をきめること 太平洋戦争（アジアにおける第二次大戦）の問題にしぼるか、その開戦（決定）の過程にかかわる問題など。いずれにしろ、何を問題にするかが問題
4班 4名	11月12日	人権とは何か	円高と中小企業との関連、部落問題	人権とは何か	部落解放研究所編：部落問題、資料と解説	（空白―記入なし）	部落問題とは何かを問うのか
5班 4名	11月19月	家族問題について	この前にやったが、不十分であったので、もっと深くやろうと思ったので	高齢化社会における老人問題について	『核家族の時代』	（同上）	老人問題―さまざまなテーマが考えられる。社会福祉政策（事業）における老人問題＝老人福祉問題、家族問題としての老人問題、他
6班 3名	11月26日	今年の10大ニュース	こっこれや！	1年を振り返って	1年分の新聞	（同上）	研究テーマとしての意味を問うこと。 選択の基準設定とそれにもとづく選択作業―社会科学の意味

（注）「指導欄」には上記のように記入し、この報告書を各班に返却するとき、口答で説明した。

理解であっても、このテーマが選択されたこともふくめて現実の問題に対して関心が一定存在していることを示している。

② 10月22日　2班　「教育問題―登校拒否について」

さきに表示したところでは、2班は当初、教育問題として「寮の食事について」、「ここの大学の定員について」などと記入していたが、報告では「登校拒否」問題をとりあげた。参考文献を明示していないが、レジメはつぎのようであった。「登校拒否とは…両親は学校に行ってほしいと願っているにもかかわらず、子供が学校に行かない状態であり、学校恐怖症とも呼ばれている」。そして「理由」として、「登校拒否の始まり」→「学校へ行かなくなると、落ち着きを取り戻し表情が明るくなる」→「間もなく暴力が始まり、日増しにひどくなる」→「暴力の時期に引き続いて、怠惰な時期に入る」→「自分の怠惰な生活や閉じこもる生活を続けてはいけないと思った時、生活は転換しはじめ回復期に入る」。そしてレジメ作成者はつぎのようなコメントを記している。「結び―登校拒否は、それが起きるまでの生活の中で、人格形成にゆがみを与えられた結果であり、その中心は自主性のおくれであるので、必ず直(ママ)ると私は信じる今日この頃です」。

このレジメによる質問討議では、4月以来まれな多数の発言が行われた。討論の中心は、登校拒否の原因が、本人にあるか家庭にあるか、をめぐる意見のやりとりであった。クラスメンバーそれぞれの体験や見聞が発言の素材になりうるので、出席者全員が発言した。私は最後のコメントとして、「報告は登校拒否がある種の病気みたいに、自然と治るようにしているのはどうか。本人の問題にしろ、家庭の問題にしろ、今日の家族や教育の社会状況の中で考えること、社会的原因―社会問題としてとらえることが大切である」と述べた。

なお、この回から発表班以外の出席者には、200字詰用紙を配布して、感想文の提出を求めた。12名の提出文のうちの1人の分を紹介しておこう。

「登校拒否、日本で問題になっている一つである。今日の討論会でも、おそらく始めてであろう深核(ママ)な話し合いとなり、数人が興ふんしていた。みんなが少し前に経験もしくは、近くでおこった事だったのか、話の中で一人一人がそれぞれ納得のいく言葉が入ってうなずく点が多かった。日本はまだアメリカほどしんこくでないので、アメリカの今の子

供たちみたいなことが起りうる前に、早めになくなってほしい」。

③　10月29日　3班　「第二次世界大戦の勃発について」

この班は3人編成であったが、欠席などで実際は1人の女子学生が単独にテーマをたて報告するようになった（他1人の男子学生はこのテーマに同意していたが、実際の準備には加わっていなかった）。この報告レジメは、野田宣雄編『二〇世紀のヨーロッパ』（有斐閣選書）によったもので、1929年の金融恐慌いらいの世界の動きを、「日本とドイツの関係」、「ミュンヘン協定から独ソ不可侵条約へ」、「第二次世界大戦の勃発とポーランド分割」の柱立てにより、年表ふうにまとめたものであった。報告の中心は、日本はなぜドイツと同盟国になったのかということであり、レジメには「問題提起」として「第二次世界大戦におけるドイツと日本の役割は、米ソの二極構造時代開幕への触媒にすぎなかったといえるのではなかろうか」と書いている。この意味は充分理解できないが、この報告発表に対して、「日本が戦争に突入した原因は何か—高校の歴史でも習わなかった」、「満州事変、日華事変とはどういうものか、説明してほしい」などの質問が出された。授業後の9人の感想文のうち、2人のものをあげておこう。

「第二次世界大戦の勃発についてのレポートを年表を中心にまとめてあるのを見て、まず最初に思ったことは、高校時代の歴史の授業を思い出した。歴史は得意ではなかったので、見てもすぐには理解しにくかった。またこのレポートの目的も説明したにもかかわらず、はっきりしなかったし、全体としては、なんだかわからない内容に終ってしまったように思う」。「私はこのレポートを読んで、何故第二次世界大戦が起ったか、またこの戦争が終って、各国にとって何を得ることができたか、戦争というものについて、もっと書いてほしいと思いました。単に時代の流れを追うだけでは、何の意味もないと思います。それにもう少し、各部分について、班なり自分なりの意見をいれてほしいと思います」。

これらには、歴史認識や歴史学習についての、今日の学生（1回生）の受けとめ方が表わされている。近代史とくに現代史の基本的史実についての知識をもっていないことや、それだけにその知識の必要性を感じている様子がみられる。年表的な史実の羅列に終った発表であったが、また歴史学習とは過去のことを「覚える」ことと受けとってきた学生が、なぜと疑問を出していることは

大切である。なぜ日独（軍事）同盟が結ばれたのか、歴史的に確かめたい状況がみられる。

④　11月12日　4班　「部落問題について」

この発表レジメは関西大学部落問題資料Ⅵ『部落問題と大学』から、「世界人権宣言と日本国憲法」、「部落差別の実態」、「今日の部落解放運動」の3項目について、部分引用抜粋したものであった。説明にあたった岐阜県出身のT君は、在日朝鮮人問題を同和（部落）問題ととり違えていた。部落問題とは在日朝鮮人の部落（居住地）の問題と思いきっていたことが判明した。こうした“間違い”とあわせて、発言や感想文の中で、中学、高校で同和教育を受けた経験を表明するものが少くなかったが、部落問題についての認識状況は不充分であるといえる。

「部落問題については、小学校以来ずっと習ってきたけれど、私は今まで実際に差別されているのを見たことがないので、よくわからないけれども、こうした差別をしている人が考え方を変えるしかないと思います」。「部落というものは、日本史の授業でしか知識がない。小学校も中学校も、地域にそれがないせいか、真剣ではあるが、深刻ではなかったので、もう一つよくわかりません」。感想文提出6人のうちの二つであるが、学生の部落問題認識の状況の一端を示している。

⑤　11月19日　5班　「核家族時代の老人問題」

この班は、前期でとりあげた松原治郎『核家族の時代』より、「老後の生活問題」、「老後の生活資金問題」、「不安な老後の生活」のそれぞれの一部を抜粋してレジメにしている。司会者（担当者）の指名により10人が発言したが、老後生活として家族との同居か別居か、どちらが望ましいかが討論の中味になった。現在、老後の生活に関して、経済的な問題はない。老人は退職金、積立金、国民年金などで、月70～80万円をもらっているから、別々に生活しても経済的に生活に苦しむことはないので、精神的問題として、別居が問題になる。という発言があり、それに対する反論、批判は出なかった。退職後、老人は皆年金などで月70～80万円の収入があると思っているなど、およそ現実を全く知らない様子が露呈された。私はまず今日の厚生年金や国民年金などの実態を知

っている限りで説明し、老人世帯の経済状況について理解を求めるのに大童（おおわらわ）であった。いまの青年学生が国民の経済生活、社会生活の現実をほとんど把握していないことが、この時の授業で思い知らされた。社会科学系学部入学生としての認識状況の一面である。なお、10人の提出感想文のうち二つを紹介しておこう。

「５班の発表について、やはり僕は両親を死ぬまで面倒を見るのか、という実感をわかせるテーマだったように思われる。年金だけで暮せないという奥田先生の体験レポートからわかるように、老後はかなり深刻な問題であって、しかも身近で、必ず近い将来おとずれるものであり、まじめに考えねばならないだろう。「老後については、いろいろ問題が多い。経済問題でいっしょに住みたくても住めないとか。経済問題では、家（注私の）では持っていた土地を売ったのと、年金で何とか祖母は暮していけると思う。政治にも問題がある。同居については、嫁と姑とかいろいろ問題があると思う」。

いますぐ具体的、実践的な解決の方法（なすべきこと）が見出せないとしても、問題の本質を客観的に明らかにし、認識していくこと、現実の問題を社会科学的に分析把握していく、そういう認識力（の基礎）をつけることを、私は「基礎ゼミ」の目標にしている。しかし学生の問題の受けとめ方は、この二つの感想文でもわかるように、「両親を死ぬまで面倒をみるのか（みなければならないのか）」と考えたり、「家では土地を売ったのと、年金で何とか祖母は暮していけると思う」とのごとく、具体的、実際的（主体的）にしか（そのことはもちろん否定すべきではないが）受けとめないという思考方法がみられる。社会的現実を対象化して社会科学的に分析して認識するという思考方法になかなか至らない。今日の学生の認識状況を示しているといえよう。

⑥　11月26日　６班　「今年の10大ニュース」

６班の中心はＹ君で、彼は在日朝鮮人学生である。前期の報告でも、この班の中心となり、またクラス委員長も引きうけている。「今年の10大ニュース」というテーマが私に示された時、今年中生起した無数の政治的、経済的、社会的現実の中から、10を選ぶこと自身は、すぐれて社会科学的認識の力を要すことだ、どういう基準で10を選び出すか興味あることだと意見を述べておいた。報告では、つぎのようなレジメを配布した（表８）。

表 8

6班　今年の10大ニュース　1987.11.26		
順位	DATE	
1	11. 25	米ソＩＮＦ全廃完全合意と 12.7 米ソ首脳会談
2	6	韓国６月民衆抗争と 12.16 大統領選挙
3	6. 8	第13回先進国首脳会議（ベネチアサミット）
4	1	イラン・イラク戦争戦線拡大
5	9. 7	東独の元首、西独を初訪問
6	6. 23	米国、世界最大の債務国に
7	6. 12	サッチャー氏３選
8	2	Ｇ７
9		東芝ココム違反
10	8. 28	フィリッピン・クーデター騒ぎ

次点　○胡耀邦、共産党総書記が辞任
○ズ・ダン号事件　○スルト君事件
○ペレストロイカ、グラスノスチ　○ベン・ジョンソン 9′83″ の世界新

報告者は各項目について詳細な説明を行った。「現代に生きる私達をめぐる情勢の展開」を跡づけるとして「国際政治を基準」にして、10大ニュースを選んだとした。とくに韓国の動きについて「今年の韓国は世界史にのこる」として、質の高い説明を行った。これに対する出席学生の質問（９人）のうち、私のメモでは、○Ｙ君はどのような韓国の発展を望んでいるか、○日本の民主主義についてどう思うか、○聞いていて、大体アメリカとソ連の対立みたいではないか、○よくもこれだけ調べたナァ、○別にない（という感想）であった。

感想文提出９人のうち２人の分を紹介しておく。

「まず最初初に思ったことは、≪今年の10大ニュース≫がどんな発表になるかと思っていたが、思っていた以上に、今まで知らなかったことや、思い違いしていたことを数多く気付かしてくれる大変すばらしい発表となった。そこで自分の置かれている立場をよく理

解し、今、何をしなくてはいけないかを考えさせられた。しかし、それも2,3日で忘れてしまって、≪あしたはあしたの風がふく≫といった考えになるだろう」。「韓国においてこれまでなんの関心ももたずにいたのですが、Y君の話を聞く中で、韓国の中でとんでもないことがおこっていたことをしりました。私達は自分の国のことばかり正統化(ママ)していて、韓国に対した、とてもひどいことをしているのにもまして、自分の国のこともあまりしらなかったと反省しています」。

Y君のレジメと報告は、1冊の参考文献だけの抜粋によったのではなく、多様な資料を集め、国際政治上の重要事件をピックアップしたのであるが、とくに韓国での諸事件の展開を詳細に報告したものであった。クラスメンバーに大きな衝撃を与えたといえよう。日本人学生がとらえきれない（関心を示しえなくなっている）政治的事件を、真正面からとりあげたことは、「政治的無関心」をいわれている今日の日本人学生に、どのような筋みちで認識をつくらせるかが示されている。同じ世代、年齢の友人が、筋みちをたてた報告をするときは、教師の「講義」以上に影響を与える。

(4) 後期の報告、討議のまとめ

以上、10～11月の間、6回、6班のレジメと報告、質問、討議の状況について、そして5回分については、授業後の学生の感想文を紹介し、各テーマについての、本学学生の問題認識の状況をみてきた。全体を通しての特徴点をみておきたいと思う。

(a) この「基礎ゼミ」では、社会科学の基礎的な見方、考え方をつくりあげる、現実に生起している社会の諸問題を社会科学的にとらえる「訓練」（？）を行うのだと、学生に繰り返し強調してきた。その中で、社会的、政治的、経済的諸問題に対して、一定度違和感をもたずに発言したり、感想文を書いたりしうるようになったと私はみている。

(b) そのことは、学生に全く自由に選択させた、後期ゼミのテーマがそれを示している。今日の青年学生が社会的問題に無関心で、自分の生活的周辺にしか関心を向けないといわれるが、必ずしもそうでないことがわかる。

（'88年度後期にも2人を1組として自由なテーマを撰択させて発表する方法をとったが、そこで学生グループが選んだテーマはつぎのようである。'87年度のそれと対比して、どのようにみるか。1年後という、時代の違いか、クラス構成による差異を示しているも

のか、検討する必要がある。自動車産業、ブランド問題、オリンピック、プロ野球、タレント問題、交通事故、地価問題、貿易問題、交通問題、マスコミ、情報、高校野球の12テーマである。）

(c) しかしある具体的な社会的問題が提出され、それへの思考が求められた時は、その社会現象（現実）に対する客観的、社会科学的考察には馴れていなく、自己および周辺の条件の中で、それにどう対処するかを考えるというとらえ方が特徴的である。それは問題に具体的に対処するともいえようが、その問題を科学的にとらえる力をつけるためには、長時間の指導が必要であろう。このことは、あとに述べる問題に対する学生の認識状況と思考方法と同一である。

なお、ここで付記するが、発言、討議ということでは、今日の学生は極めて不充分な実態を示している。Aの意見について、Bはこう考えるというような「討論」は、1回生という制約はあるが、なかなかできない。さきに示した学生の意見も、担当者が司会し、指名されての発言である。高校までの選択肢による正答誤答方式の学習の影響であろうか。さきにいったように授業後、200字程度の感想文を提出させてきたが、そこでは紹介したように、自己の受けとめ方、考え方をまとめているので、文字によるそれと口頭発言（の出来なさ）との差違が、今日の学生の一般的特徴といえまいか。

Ⅵ 社会常識テストとビデオ学習

(1) 社会常識テスト

'87年12月3日に、つぎのような50問を用意した「社会常識テスト」を行った。これは年間授業計画の中で、2講時の余猶が出たので、担当者として、思いついて行ったもので、いささか非計画的なものである。50の設問に対して、表下欄にあるように「(注) ひとこと説明、〝なんのこと〟という説明でよい。最近の新聞紙上にみられるものから、アトランダムに選んだ。時事社会常識テスト」と説明して回答を求めた。50項目は'87年秋の時点で、日本および世界での政治、経済、文化、スポーツ、世相などについて担当者が思いつくままに選んだものである。このうち、カタリーナ・ビット、リシャール・ルロワ、山口香、板木冬美などの人名は、この前後にたまたま新聞記事になったものである

から、出題として適当でなかった。

表9には、原用紙の回答記入欄に、当日出席者13名（A～M）の正答、誤答（記入しているが全然違っている）、無記入の状況と、％であらわした正解率を示した。正答率70％以上は、古都税、長島一茂、サッチャー、瀬戸大橋、残留孤児、黒柳徹子、こしひかりである。13人の誰も無記入であるのは、カタリーナ・ビット、No_x、因島、コントラ、池子の森、前川レポート、前島りんくうたうん、リシャール・ルロワ、山口香、課程審である。表の最後の欄に各人別の正答数を記入しておいた。20％から54％となっている。おおよそ、今日の学生の社会事象に対する常識的認識状況がわかる。

(2) 12月10日ビデオ学習

本学では、図書館棟に視聴覚設備（ビデオ）教室が設けられているので、12月10日に、『五太平流転―高島炭鉱閉山の記録』をみる時間にした。これは1987年に朝日放送（九州局）が製作したもので、三菱高島炭鉱閉山によって失業した一家族（近藤一家）の生活状況を追跡した作品である。50分のこのビデオ作品をみたあと、すぐ感想文を書き提出してもらった。15名の感想文（200字以内）の内容をそれぞれ要約するとつぎのようである。

1. ひさんであると思った。父親の仕事は見付かったか。2. ひさんな人生で涙が出る。退職金が47万円、大ぼけだ。やはり大学ぐらい出ないとあかん。3. 石炭はいずれなくなる。仕方がない。自分は同じような状態にならぬようしたい。4. つくづく骨身に感じる思い。5. 閉山、家族への影響はこんなに大きいとは思わなかった、企業もつめたい。6. 会社のわがままで悲しむ家族が出ている。7. 就職先がないことは大変とつくづく思う。大阪にいることは幸せ（職があるから）。8. 高校にいけない、かわいそう。これからどんどんそんな人が出てくる。日本政府はしっかりしないから悪い。炭坑なくなる、外国いぞん、いやな気。9. 近藤さんの気持、思うに余りあり。三菱の冷たさは何だったのか。10. 大企業でも従業員の生活は保障できない。47万の退職金。普通の会社員では考えられない。ポイとすてる大企業の責任がある。11. 企業は利潤だけを考えている。ほかにも問題は多い。12. 一つの炭坑を失うと、いろんな問題があると感じた。13. 47万円はかわいそう。どうにかできればよいが。14. 失業で島をはなれなければならないのは仕方がない。15. 労働者の生々しい現実、苦しみを見た。なんともやるせない気持。国は労働者のことを親身になって考えねばならぬ。

以上にみられる学生の問題把握の特徴について、'88年1月14日の授業時間

表 9　13名の集計〔ＡＢＣ…は学生を示す記号、○正答、×誤答、空欄は無回答。％は13人中の正答率〕

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	正答	誤答	正答%
カタリーナ・ビット									×						1	0
原野商法			○											1		7.7
南ア機		○		○	○		○	○	○	×	○		○	8	1	61.5
金大中	○	○		×			○				×	○	○	5	2	38.4
古都税		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	11		84.6
指紋押捺	○		○	○	○		○		×	○	○		○	8	1	61.5
湾岸諸国										○	×			1	1	7.7
No_x																0
因島				×		×		×							3	0
太平洋プレート			○		○	○				○	○	○		6		46.1
コントラ																0
ふるさと創生論			○								×		○	2	1	15.3
池子の森																0
利根川進	×	○			○			○	○				○	5	1	38.4
産直	○	○	○							○	×	○	○	6	1	46.1

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	正答	誤答	正答%
シェワルナゼ		○	×				×			×		×	○	2	4	15.3
板木冬美					○									1		7.7
残留孤児	○	○	×	○	○	○	○		○	○	○	○		10	1	76.9
国保								○				○		2		15.3
超電導			○	○		○	×			○	×			4	2	30.7
前川レポート																0
兜町北浜													○	1		7.6
三沢基地		○					○			○	×			3	1	23.0
黒柳徹子	○	○	○	○	○	○	○		○	×	○	○	○	11	1	84.6
地上			×	○	○	○	○			○	×			5	2	38.4
こしひかり	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	12		92.3
赤川次郎	○		○	○	○	○	○	○		×	×	○	○	9	2	69.2
アフガン問題			×				○		○	○	×			3	2	23.0
鄧小平													○	1		7.7
宮崎緑				○	○		×	○		×				3	2	23.0

ペレストロイカ							×						○	1	1	7.7	前島りんくうたうん								×						1	0
長島一茂	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	12		92.3	リシャール・ルロワ																0
テレカ少年		○					○				○		○	4		30.7	S D I	○		○			○	○			○	×		○	6	1	46.1
ヤンバルクイナ	○	○	○		×	×				○	×	○	○	6	3	46.1	山口香			×								×				2	0
ココム	○	○		○		○			○	○	×		○	7	1	53.8	帰国子女			○											1		7.7
サッチャー	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	10	3	76.9	シュルツ		○		×	○		×		○	○	×		○	5	3	38.4
財テク			○			○	○		○	○	○	○	○	8		61.5	熟年			○	○		○	×	×			○	○		5	2	38.4
土井委員長	○	○	○	○	○		○		×		×	○	○	8	2	61.5	課程審																0
瀬戸大橋	○	○	○	○	×	○	○		○	○	○	×	○	10	2	76.9	江本孟紀	○		○		○	○	○	○		×		○	○	8	1	61.5
サラダ日記			○		○			×	○	×		○	○	5	2	38.4																	
花博				○			×		×	○			○	3	2	23.0	各人正答数	14	18	21	16	18	16	18	10	10	20	12	17	27			

（注） ひとこと説明、“なんのこと”という説明でよい。
最近の新聞紙上にみられるものからアトランダムに選んだ。時事、社会常識テスト。

18ａクラス　学生番号＿＿＿＿＿＿＿＿　なまえ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1987.12.3（木）

に、私の考えを話した。学生の受けとめ方、見方を、感想文のことばと文字を使って要約すると、つぎのようになる。

① 悲惨で涙がでる、骨身にかんじる、かわいそう、思うに余りあり、なんともやるせない気持、47万とは無茶、就職先のないのは大変。

② 父親の仕事はみつかったか、どうにかできればよいのに。

③ 企業のつめたさ、三菱の冷たさ、大企業も労働者の生活を保障できぬ、会社のわがまま、大企業の責任。

④ 大学を出ていないといけない、自分も同じようにならぬようしたい。職のある大阪にいるのは幸せ。

さらに要約すると、学生の感想は、悲惨だ、可哀想だ、しかし仕方がない、自分は同じようにならぬようにしよう、ということになる。ビデオでは、閉山後、失業に追いこまれた近藤一家は、娘は高校進学をあきらめて、名古屋の紡績工場に働き、企業内定時制高校で勉強する姿、3年の失業保険が切れるまで就職できるどうか不安な近藤さんの家、そして高島の再建を断念して見棄てる会社側の姿などの映像が克明につづられている。それらに対して、悲惨だ、可哀想だととらえる。私はまとめの中でつぎのように話した。そうした主体的心情は大切である。こうした民衆の不幸な現実に対して、何の感情も示さないことは、認識として問題がある。その点、諸君らの、三菱に対して憤りを感じ、悲惨だ可哀想だという心情は貴いことである。しかし、そうした感性的認識の段階から、こうした家族を生み出す経済的、政治的、社会的理由を追求して、現実に対する客観的認識をつくりあげることが必要である。現在のエネルギー政策の下で石炭産業が解体されていく国の石炭政策、その中での企業の社会的責任の問題、国民の生活・社会保障の問題、産業空洞化の問題などにも検討を及ぼしていくことが必要である。閉山、失業家族という社会的現実に対して、社会科学的認識を深めついくことが、この「基礎ゼミ」の目標である。諸君のこのような状況になるのは仕方がないとする見方は、科学的認識へすすむ方向ではない。まして、自分も同じような目にあわぬようにしたい、そのため学歴も必要だ、大阪では多様な就職機会がある、高島でなくてよかったという結論に至るのは、問題を正しく認識していないことを示している。以上のようなコ

メントをしたが、問題点の指摘だけに終って、このコメントを学生がどのように受けとめたか、確かめえなかった。

1年間の「基礎ゼミ」を通して、今日の学生の社会的現実への対し方、そこからどのように社会認識を発展させていったか、それを検証することはむずかしい。前期・後期の授業における学生の認識状況については、その都度特徴点を述べておいたが、この「ビデオ学習」のものをもふくめて、通していえることは、社会的問題に対して、自己の生活体験と身辺的視点より、現実を見、対処するという思考方法が特徴的であるといえよう。このような学生の社会認識・実態をふまえて、広い視野で社会科学的に問題をとらえる力量を学生につくるために、講義、ゼミさらに大学教育全体にわたって、どのように工夫し実践していくべきか、深められる必要がある。

Ⅶ　レポート提出

後期の班ごとのテーマによる発表と討議が、前述のように経過したが、その当初から、班ごとに共同でレポートを作成提出するように指示していた。3人ないし4人連名の共同レポートである。これは、基礎ゼミでは、共同学習を可能なかぎり追求することを目指したからである。発表までの班としての学習・研究の日程をつくるように求めたのもそのためであった。しかし結果としては、共同学習の実は全くあがらなかった。結局班員が分担するか、名前だけ連ねているか、1人（2人）が請負っているようにみられた。2000字と要求したレポートは共同労作物ではなく、内容的には、報告の時のレジメを文章化したもので、討議内容などはふまえられていないものであった。

Ⅷ　アンケート調査

最後の授業日（'88年1月21日）に、つぎの項目によるアンケート調査を実施した。

1）1年間のゼミのうちで、もっとも勉強になったと思うことは何か
2）ゼミのすすめ方（グループ報告・討議という方法、教員の指導その他）についての感想

3）ゼミクラスとしての友人関係やクラス生活についての感想
4）ゼミ以外の講義や語学その他1年間の大学教育を体験しての感想
5）1年間の大学教育（ゼミ、講義全部）のなかで、もっとも勉強になったと思うところ
6）課外活動（スポーツ、文化その他サークル）への参加の有無、その状況（付アルバイトのこと）
7）大学生活全体（下宿もふくめて）についての感想
8）この1年間で、教科書以外で読んだ本（単行本、文庫、新書）の冊数と印象に残っている書名
9）あとの3年間で、もっとも勉強したい分野、問題は何か
10）卒業後の進路について、いま考えていること
11）大学全体についての印象、大学に注文したいこと、改善してほしいこと
12）今年1988年、日本や世界の諸問題のうちで重要と考える問題を二つ。

全項目について集計整理するスペースがないので、第1項目の回答のみを紹介しておく。

1）前期の先生のくれた新聞の記事で、班の討論を行ったこと。2）新しい授業と思った。大学だと思えた。3）社会問題について考えさせられることが多かった。4）レポートを書く練習。5）いろいろの意見を聞けたこと。6）今まで聞き流していたことなどでも少しは気にとめるってこと。7）新聞などの見方がかわった。8）いろいろな人間とあえてよかった。9）各班がさまざまな問題をとりあげて討議したこと。10）知らない人に出あえてよかったし、グループを作って自分たちでテーマをきめて発表できたことが勉強になったと思う。11）社会問題についていろいろ考えさせられたこと。12）土地問題。13）話の聞き方、話の仕方、物の見方、考え方。14）本をさがしたり、理解しての発表。15）社会のことが多少わかるようになった。16）いじめや教育問題をとおして、家族やその他のあり方について勉強になった。17）高校とは違い討論的なことでいろいろ問題がわかった。

全体として「基礎ゼミ」が少人数クラスの授業として、また報告・討議を中心として運営していることについて、肯定的に評価している。もちろん討論らしい討論になったのは、年間を通して2～3回ぐらいというのが私の印象である。つめこみ、覚える式の高校授業にくらべて、このゼミが新鮮に写ったのだといえる。科学的社会認識の基礎をつくるという、設定した目標に対しての成果は、これらの回答だけではよくわからない。社会や社会問題について多少とも、わかり考えるようになったという回答があるのは一つの成果といえよう

か。他の項目の回答の中で「最終的結論の出し方の難しさを知った」、「グループの報告だったので、友達同士で考えあえたのでよかった」などともあわせて、社会事象について検討し考えることを、よかったとしていることは成果といえよう。ただ、〔V〕でみたような克服すべき思考様式（身辺の利害から判断する）が、最終段階においてもみられることとも関連させて、これらの回答を評価する必要があろう。

全体として、担当者として基礎ゼミ１年をどう自己採点するか困惑するが、「教員の指導が今一歩だったが、熱意が伝わった」という回答もみられた。もって瞑すべきか。

Ⅸ　単位認定状況

基礎ゼミ授業は少人数（30名以下）クラスで、報告討論という形であるので、出席を義務づけ、開講当初からその意義を学生に話して出席を督励してきた。そして三分の二以上は単位認定の必要条件とする旨周知させてきた。実際の出席状況はⅢで示しておいた。

この年度の授業回数は全部で26回であった（休講なし）。その出席状況と夏期レポート提出状況およびテーマ発表状況、クラス討論での発言状況をも加味して、四分の三以上出席し、かつ夏期レポート提出者は80点とし、三分の二以上出席、夏期レポート提出者は75点、この二つを基準とした。二分の一以上三分の二未満の出席者も合格認定の対象とし、二分の一以下の出席者は同時にレポート未提出者でもあり不合格とした。実数および比率はつぎのようである。

合　格	80点	11人	50%	78%
	75〃	2〃	9〃	
	70〃	2〃	9〃	
	65〃	2〃	9〃	
不合格		5〃	22〃	22%

X まとめ

大学は研究と教育を任務としているが、今日の状況の中で、とりわけ、広汎な国民の高等教育機関としての役割が大きくなっており、国民の「大学教育」への関心が高まっている。しかし大学教育そのものの学問的研究は必ずしも多くない。「教育」研究とは主として初等・中等教育（小・中・高）に関するものという考えが強く、大学については、一般的な大学論、高等教育論あるいは焦眉の大学入試制度問題などへの言及が目立っているといえる。「大学教育」自体を対象化して分析し、大学教育の改善に資するという問題意識は、全体的には大学教員には今日なお稀薄だといえよう。大学における教育は研究を基礎とするものであり、その研究成果にもとづいて、どのような講義内容をつくりあげるかが、大学教員の問題関心である。そのことは当然であるが、今日の学生実態をふまえ、教授方法も念頭においた大学教育のあり方を検討し、深めていくことが要請される。

このような中で、「一般教育」については早くから一般教育学会がつくられて、各大学における「一般教育」研究が比較的多彩にすすめられてきた。近年は各専門教育に関する教育研究も、歴史学教育、法学教育、経済学教育等々それぞれの分野での専門教育の問題が数多くとりあげられてきている。『雑誌記事索引』人文社会編累積索引版、昭和50～54、シリーズF教育スポーツ、（紀伊国屋書店、1981年刊）には、その5年間に著作された「大学教育」関係論文のタイトルが収載されている。医学・薬学・看護学教育から始まって、一般教育、情報処理教育、歴史教育、英語・ドイツ語教育、芸術教育、自然科学教育、工学・農学教育、人文・社会科学教育、家政学教育、社会福祉教育、法学教育、保健教育の各領域にわたって、各大学教員によって、大学教育の研究がすすめられていることがわかる。

しかし、各大学に共通して実施されている低回生学生に対する、入門ゼミ、プロゼミ、基礎ゼミなど名称はさまざまであるが、少人数クラス（小集団）教育に関する実践報告やその研究はほとんどみられない。こうした少人数ゼミは、とくに私立大学における大教室講義と組合せて、低回生教育としてまた4

年間を通ずる少人数教育として、重要視されているにかかわらず、この授業の諸経験を分析整理していることが案外少ないように思う。それぞれの大学や学部のさまざまな条件の違いの中での実施であるから、形態・内容とも多様であろう。本大学における１回生ゼミの実態を報告する小文はその意味で一つの素材を提供するものになると思う。

さらに、この小論では「今日の学生の社会認識状況」とタイトルしたが、社会科学的認識の基礎をつくるという、この「基礎ゼミ」の目標が、今日の新入学生の既存の社会認識にどう切りこみ、変化させ、発展させていったか（あるいはいかなかったか）をあとづけようとした。高校までの教育、激烈な進学競争、また問題を発見しにくい社会状況の中で形成された（あるいは形成されなかった）社会認識の実態を明らかにして、それにどう対処していったかを中心として、私の実践を不充分ながら整理したものである。

今日日本には四年制大学は三百数十あり、国公私立の違い、規模の大小、歴史や特徴の相違はさまざまである。入学学生の層（学力水準その他）の違いがある。「今日の学生」と一括しえない。共通の面もあれば、特殊性もある。したがって、学生の実態に即した教育実践といっても極めて多様である。同じ担当者でも、入学年度の違い、クラス構成などによって、教育実態は大へん違ったものになることも、しばしばである。それぞれの多様な教育経験を交流・交換し、大学教育の成果を高めていくことが求められる。入学試験制度に国民的な関心が集中するが、入学後の学生の教育のあり方にもっと、大学教職員や国民の論議がよせらるべきと思う。

この報告は、社会科学系の学部での一つの試みにすぎないが、多くの批判をよせていただきたいと思う。　（1988. 11）